慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	浅井了意筆『難波物語』等について
Sub Title	Asai Ryoi's"Naniwa-monogatari"
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2003
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.84, (2003. 6) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00840001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浅井了意筆『難波物語』等について

石川　透

一、はじめに

仮名草子最大の作家として知られる浅井了意については、さまざまな研究がなされている。しかし、その人物像にはまだ謎が多く存在し、没年は元禄四年（一六九一年）と明らかにされているものの、生年は明らかにされていない。また、その著作についても、北条秀雄氏『改訂増補浅井了意』（笠間書院、一九七二年）に、「確実に了意の作と認めうるもの」「大体了意の作と認めうるもの」「真偽未決のもの」等が分類されているように、著作の全てが明らかにされているわけではない。了意の著作については、北条氏以降も多くの研究者によって、了意の著作として可能性が高い作品が指摘されてきた。

そして、その了意の著作として認めうるもののうち、十四点については、了意自身が版本の版下の執筆を行っていることが、古くから指摘され、補われてきた。日本の印刷文化は、奈良時代の百万塔陀羅尼以来連綿と続いているが、今

日いう文学作品が印刷され始めたのは、江戸時代初期からである。よって、江戸時代初期から前期にかけて製作された仮名草子は、多くが印刷本（版本、刊本）として残されている。あまり研究されていないことであるが、その印刷本を製作する時には、作品の作者以外の、字のうまい筆者（筆工）が清書したものを版下に使用していたらしい。ただし、印刷本の製作者からいえば、版下を作品の作者自身が製作してくれれば、より都合がよいことになる。したがって、江戸時代前期の作品群の中には、北村季吟のように、明らかに作者自身が版下を執筆している例も存在する。

浅井了意は、字のうまい人であったらしく、このような自分の作品の版下を書くことができる人物であったようだ。この了意の自筆版下と呼ばれる作品群については、自筆ということ自体を疑うむきもあるが、拙稿「浅井了意筆奈良絵本・絵巻の存在」（『中世文学』第四七号、二〇〇二年六月）、「浅井了意自筆資料をめぐって」（『近世文藝』第七六号、二〇〇二年七月）に記したように、了意の筆跡を残しているとみて間違いないであろう。このことは、版下を裏返して板に貼り、その墨の部分を残して彫るという、いわゆる彫り師の技術の高さを示すことにもなる。実は、私は奈良絵本や絵巻物等の写本の筆跡を研究していたが、先入観として、一度彫り師に任せた印刷本は、筆跡鑑定には使えないと考えていた。しかし、浅井了意や北村季吟等の自筆版下の印刷本を、本人の自筆資料と比較する限り、印刷本はきわめて忠実にその筆跡を残していることがわかるのである。

このような先入観は、他にもある。昭和初めまでに公刊されたいわゆる複製本については、複製本を公刊した時に、相当に文字そのものを修正しているので、信用してはならない、ということは何人もの先学から教えられてきた。もちろん、これはある程度事実であろう。私は、これではとうてい筆跡鑑定に使えないと考え、それら昭和初期以前の複製本をあまり熱心に参観せずにきたのである。しかし、これから記すように、これらの複製本も十分に使用できるものが

あるのである。
本稿では、『難波物語』という仮名草子作品の複製本を糸口に、これが浅井了意の版下によるものであること、さらには、奈良絵本には、まだ浅井了意筆の可能性がある作品が存在していることを記したいと思う。

二、『難波物語』の版下筆者

『難波物語』は、明暦元年（一六五五年）に刊行された、遊女評判記の嚆矢とされる仮名草子である。作者は不明である。『国書総目録』等の索引類には、原本の所在を示す記述はない。昭和七年に、稀書複製会第七期第二回配本として、複製本が刊行されている。
この『難波物語』の明暦元年刊本が、二〇〇二年五月の大阪古典会による古典籍の展観に出品された。残念ながら、当日私は、やむを得ぬ事情により、展観を見ることができなかったが、事前に配布された展観図録である『創立百周年記念　古典籍善本展観図録　難波津』（大阪古典会、二〇〇二年五月）には、本書の一葉が鮮明に写されていた。
その一葉の写真は、浅井了意の筆跡に極似したものであった。そこで、その複製である稀書複製会本を取り寄せてみると、一冊本の短い作品ではあるものの、全ての字において明らかに了意の筆跡であった。すなわち、「門」という字の左上の横棒や縦線の曲がり方、「人」の字の右下へののばし方、「也」の字の真ん中の縦棒の突き抜け方等、了意の字の特徴を全て満たしているのである。もちろん、平仮名の癖についても同様であった。本論末尾に、稀書複製会の『難波物語』の一部を掲載するので、それらをやはり後掲の浅井了意筆『源平盛衰記』や、前掲拙稿等の図版と比較していただきたい。

そして、念のために、展観図録の一葉と稀書複製会の該当箇所とを較べてみると、虫食いと思われる箇所はあるものの、基本的に全く同じ印面であった。ということは、この複製については、ほぼ忠実に明暦元年の『難波物語』を複製しているとみてよいことになる。

『難波物語』が了意の版下であることになると、『難波物語』は、了意の自筆版下である可能性はないのであろうか。すなわち、版下を写しただけではなく、了意が『難波物語』の内容を記した可能性はないのであろうか。

少なくとも、これまで明らかにされてきた了意の自筆版下の十四点は、全て了意が内容をも記した、了意作の可能性が高い作品群であった。版本については、了意の筆跡は、了意自らの作品と思われるものにしか登場していなかったのである。

三、『難波物語』の作者

そこで、『難波物語』の内容を検討してみると、既に、『日本古典文学大辞典』第一巻（岩波書店、一九八三年）の「江戸名所記」の項（市古夏生氏執筆）等にも指摘されていることではあるが、本書には、了意自筆版下であり、了意作である『江戸名所記』ときわめて類似した記述がみられるのである。『江戸名所記』は、『難波物語』の刊行から遅れること七年の、寛文二年（一六六二年）に刊行された、江戸の地誌である。ただし、成立は万治二年（一六五九年）頃とする意見がある。

その類似箇所を列挙すると、以下のようになる。最初に『難波物語』を掲出し、続いて『江戸名所記』を掲げる。

『難波物語』（稀書複製会本による。私に句読点を補った）

我ゆくうちは、人をしからず。わがえゆかねば、人をそしる。これ、利はつにてそしるにはあらず。ほうかいりんきといふものなり。

『江戸名所記』（巻七。近世文学資料類従本による。私に句読点を補った）

そのうへまた、此道を、もしあそぶを叱りそしるは、わか身のえぬ故なり。これ、利はつにてそしるにはあらず。只法界悋姫といふもの也。

『難波物語』と『江戸名所記』には、このような類似箇所が散見する。明らかに両者は関係を有するのである。成立の時代からすると、『江戸名所記』が『難波物語』を利用しているとみるべきであろう。

『江戸名所記』には、他の作品と類似した箇所がいくつか存在し、その一つがこの『難波物語』なのである。これ以外にも、前掲市古氏は、『東海道名所記』や、『かなめ石』を指摘されているが、この二作品は、了意の自筆版下が存在するように、内容も了意の作である。だいたい、了意の作品には、自身の作品の流用や利用が散見している。今日のような著作権がない以上、他人の作品を流用することも頻繁に行われていたであろうが、やはり、一番利用しやすいのは自分自身の作品である。となると、『江戸名所記』に流用されている『難波物語』は、了意の作品である可能性が高いのではないであろうか。了意の筆跡を有する版本において、この作品だけが別人の作品であるというのも、変な話である。やはり、素直に考えるならば、この『難波物語』も、了意自身の作品であり、自筆版下の一つとみるのが妥当であ

ろう。
実は、この『難波物語』の内容の検討から、前述のような類似を指摘され、さらには『難波物語』が了意の作ではないかとされた研究者がいる。それは、北条秀雄氏『改訂増補浅井了意』の註に示されている岡本隆雄氏である。岡本氏は、以下に示す論考を発表されているが、研究会の会報ということで、図書館や国文学研究資料館にも収蔵されていないために、容易に参観できない。幸い、北条氏がうまくまとめ、しかもその評もしておられるので、その北条氏の註を引用しよう。

北海道大学近世文学研究会々報、第十五号（昭和四十四年七月）第十七号（昭和四十五年十月）に、岡本隆雄氏が「『難波物語』について」という論考を発表された。明暦元年五月刊の『難波物語』は、島原の遊女評判記であるが、編著者名、刊行書肆名を欠き、明暦元乙未中夏吉辰という刊年月を記すのみである。岡本氏は、この『難波物語』と『江戸名所記』吉原の条を比較して、吉原の条はその大部分が『難波物語』を元にして書かれていること、その他両書は二ケ所程極めて類似の文章が指摘出来、更に両書の末尾「口をとぢて三ツ四ツうなづいて笑ふ」という文章も同一であると、例文を抜き出し比較されている。其他評判の仕方、比喩の方法、等を詳細に比較して、両書の緊密な類似を指摘し、最後に、『難波物語』と『浮世物語』をつなぐ描写を示している。岡本氏は右によって、『難波物語』が了意ではあるまいかという提示を試みておられるのであるが、まことに興味ある論考である。

以上のように、岡本氏の考察された内容からみても、刊本の筆跡からみても、『難波物語』は、了意の自筆版下の一

つとみてよいのではあるまいか。

四、『難波物語』の意義

このように、もし『難波物語』が了意の自筆版下の作品であるとすると、了意自筆版下の作品の中では年号を記した最古の作品ということになる。そのことを確認するために、『難波物語』の刊記を記すと、以下の通りである。

明暦元乙未中夏吉辰

年号と時期だけを記した簡潔なものである。この刊記は、本文より固い字体で書いてあり、了意の筆跡とは異なる印象を受けるが、了意作『可笑記評判』の寛永十四年（一六三七年）の奥書のような虚偽のものではあるまい。

この『難波物語』が明暦元年頃の了意の筆跡であるとするならば、比較するのにちょうどよい材料となるのが、やはり明暦元年頃に執筆された架蔵の『源平盛衰記』四十九帖である。この内容と奥書については、拙稿「浅井了意自筆資料をめぐって」に記したので詳述はしないが、最終帖の第四十八巻には、

明暦元年乙未十月中旬第二日

と了意のものらしき奥書があり、各巻それぞれの表紙に隠れた箇所には、明暦二年に写したとの年号等が、多く記され

ている。
このほぼ同時期に写された『難波物語』と『源平盛衰記』の比較を行うと、その筆跡は、きわめてよく似ている。おそらくは今後、明暦元年前後の浅井了意の筆跡を示すものとして、刊記や奥書のない了意筆の作品を時代判定する材料となりうる。了意筆の奈良絵本・絵巻については、奥書がないのは当然のことであるが、刊本としても、了意の自筆版下の作品群には、刊記のない作品が多く存在している。一方、筆写の年代が明らかな写本や、刊行年の明らかな版本を整理すれば、年代による筆跡の特徴が見出され、同じ了意の筆跡でも、時代による差が出てくるであろう。
了意の最晩年の筆跡を示すのは、『狗張子』の了意の序と巻一から巻六までの自筆版下である。『狗張子』冒頭の林義端の序を信じるならば、これらは元禄三年（一八九〇年）までに記された了意の遺稿を版にしたものである。この年は、明暦元年から三十五年の差がある。浅井了意の筆跡は、全体的に変化は少ないという印象があるが、それでも、三十五年の差があれば、同じ人間でも筆跡に差が出るものである。そのような筆跡による時代判定が、今後可能になるであろう。
どのような人間でもそうかもしれないが、だいたい、年代の若い時には大ぶりの字を書き、時代とともに字が小さくなる傾向がある。明暦元年の『難波物語』『源平盛衰記』の筆跡は、了意の筆跡の中では、大きくゆったりした字で執筆している。刊行年代不明の『三綱行実図』はこれに近い傾向がある。また、「浅井了意筆奈良絵本・絵巻の存在」に示した了意筆の絵巻群は、やはりこれらと同じ特徴を有するのである。絵巻群については、自筆版下の作品群と違って、内容的には了意の作品ではなかった。もちろん、『源平盛衰記』も了意が創作した作品ではない。いわば、詞書書写の仕事を、他の詞書書写者と同じように分担しているのである。

このように、了意筆の絵巻の筆跡が、明暦元年前後の了意の初期の筆跡と共通する点が多いという事実は、了意が、仮名草子の作品群を量産する以前に、絵巻や奈良絵本の筆写を担当していた可能性が大きいことを示すことになる。これらの推測も既に前掲拙稿に記したが、おそらくは、了意は、万治二年（一五五九年）刊の『堪忍記』で著名になる前には、『伊勢物語抒海』等のさまざまな注釈書類を記すとともに、絵巻等の書写を担当して収入を得ていたのではないかと思われるのである。

このような前時代の作品の書写や注釈を行うことは、とりもなおさず、作家としての素養をみがくこととなったであろう。今日、最大の仮名草子作家といわれる了意が、いかにして作家となったかということは、不明の部分が多いのであるが、一つの道筋としてこのようなことが考えられるのである。

五、『義経地獄破り』の筆跡

版本『難波物語』の版下筆者が了意であること、それと了意筆の写本や絵巻との関係を中心に述べてきたが、実は、奈良絵本については、これまで指摘してきたもの以外にも、了意の筆と類似するものが存在している。

アイルランドのチェスタービーテイに伝わる『義経地獄破り』は、内容的にも珍しく、興味深い作品として知られている。奈良絵本国際研究会議編『在外奈良絵本』（角川書店、一九八一年）に、翻刻とともに全文の写真が掲載されている。私は、以前から浅井了意の筆跡に似ていることには気付いていたが、少し異なる点がみられること、何より、写真が小さく白黒で不鮮明であること等によって、判断を保留してきた。たまたま昨年（二〇〇二年）の三月に、チェスタービーテイライブラリーに赴き、調査をすることができた。

最初に、『義経地獄破り』の書誌を記す。

所蔵、アイルランド・チェスタービーティライブラリー
番号、CBJ一〇一七
形態、奈良絵本、二冊
時代、[江戸前期]写
寸法、縦二四・六糎、横三三・五糎
表紙、黄土色繻表紙
外題、題簽欠
内題、なし
見返、金色紙
料紙、下絵入り斐紙
行数、半葉一二行
字高、一九・二糎
丁数、上・二三丁、下・一八丁
挿絵、上・九頁、下・九頁

いわゆる横型の奈良絵本であるが、その大きさは特大のものである。この大きさの横型奈良絵本は珍しく、奈良絵本の中でも最も豪華な部類に属する。チェスタービーティライブラリーには、同じ装丁の『住吉物語』三冊（CBJ一〇二一）が存するが、筆跡等の細かな点まで一致しているわけではない。

さて、『義経地獄破り』の詞書の筆跡は、横に大きな本に記したせいか、字として変形し、しかもぽてっとした印象を受ける。一字一字の平仮名を見ると、「を」や「の」のように浅井了意の平仮名とよく似た文字が存在している。しかし、漢字の特徴は、「門」の字の左上の横棒は若干見られるのであるが、了意にしては「人」の字の左下への延ばし方が足りない。また、「也」も少し異なるのである。さらに平仮名にも、「あ」や「や」等に、了意には見られない筆跡が存在している。

全体の漢字の数が少ないために、用例が足りない面があるのだが、漢字については、了意筆と簡単には断定しにくいのである。ただし、部分的には了意の雰囲気を示しているといえよう。現段階では本書の上質の写真が手に入らず、採字して一覧表に並べることができないのであるが、よく似た字として考慮すべきもののようである。もし了意筆であるとすれば、横に大きい本であるために、字がふだん通り書けなかったか、それよりも、わざと少し変えて紙に合わせて書いたということになろう。

筆跡が確実に了意というものではないから、この先は簡単に記すが、了意の筆跡であるならば、次のような問題が発生する。本書は、現在のところ、孤本の作品である。それが了意の筆跡であるとすると、自筆版下のように、了意が創作したものを自ら清書したものではないか、という可能性がある。『義経地獄破り』は、御伽草子に分類されているが、内容からみても、やや新しい印象を受ける。成立は、浅井了意の活躍期に近いかもしれない。そのような可能性がある

ことを記しておきたい。

六、おわりに

『義経地獄破り』については、上質の写真を利用した精査が必要であり、それを経なければ断定はできないし、別人の筆の可能性も大きいのであるが、この『義経地獄破り』を含めて、浅井了意の筆跡とよく似た筆跡を有している奈良絵本が他にもある。

例えば、慶應義塾図書館蔵奈良絵本『若菜の草紙』は、個人蔵奈良絵本『つきわか物語』とつれの作品で、内容は御伽草子の『七草ひめ』なのであるが、「御ゑさうし、天下一、小泉やまと」の印記が押されている特大横型の奈良絵本である。奈良絵本としての形は、『義経地獄破り』とよく似ている。この『七草ひめ』の筆跡が、やはり浅井了意のものに似ているのである。しかし、「門」の字の帽子がないことや、平仮名に違う字が多いこと等から、別筆と思われる。あるいは、時代や製作環境が近いから、浅井了意の筆跡ともよく似てしまうのであろうか。

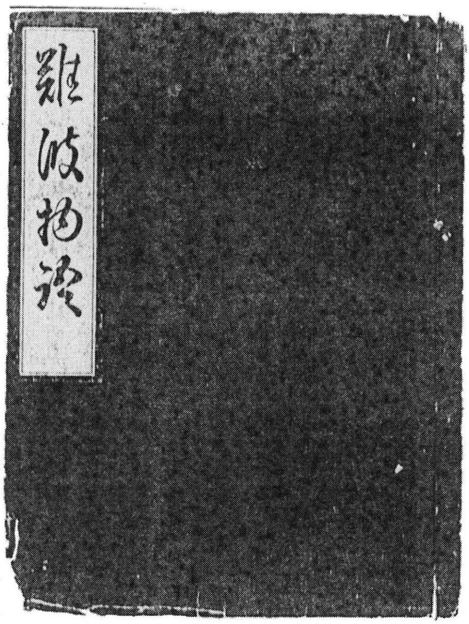
また、国会図書館蔵奈良絵本『大職冠』は、特大縦型の奈良絵本であるが、この『大職冠』も『七草ひめ』の筆跡に近い。この二つは同筆ではないかとも思われるが、これが『義経地獄破り』の筆跡にも、浅井了意の筆跡にも、似た面があるのである。あるいは、『義経地獄破り』は、この『七草ひめ』『大職冠』と同筆であり、浅井了意の筆ではないのかもしれないが、このようなまぎらわしい筆跡が存在するのことも事実なのである。

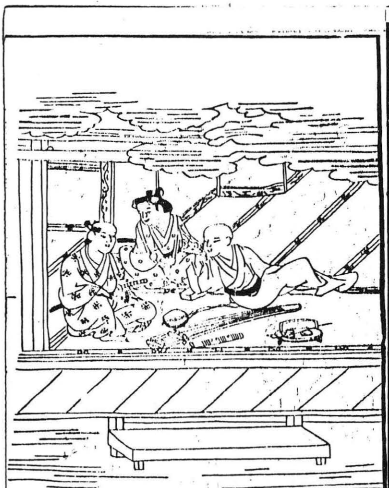
奈良絵本・絵巻において、私が了意筆と判断するものは、現在のところ前掲拙稿に記した作品群だけなのであるが、とうぜん、今後同じ筆跡のものが出現するであろうし、『義経地獄破り』のような了意筆と類似した作品については、

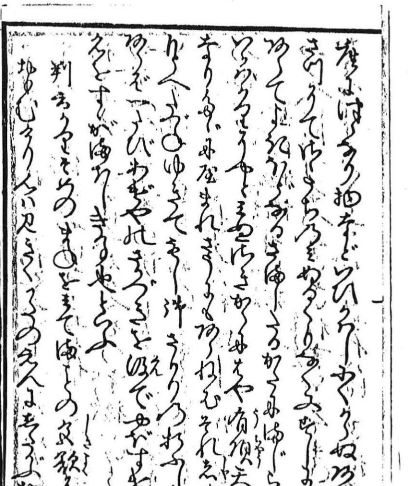
同筆か別筆かの判定が下されることになるであろう。このような作業は、奈良絵本・絵巻研究の第一歩である。今後とも、しばらくはより厳密に鑑定する作業が必要となるであろう。

本稿の内容は、二〇〇二年度藝文学会研究発表会（二〇〇二年六月一二日、於慶應義塾大学）において発表したものである。

最後に、『難波物語』と『源平盛衰記』の複写を四枚ずつ列挙する。


難波物語





それしやうくわくさ[illegible]初めこれをとをり
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

三十

しやうくわくとしてさかへ[illegible]
てけり

明暦元乙未中夏吉辰

印行五百部之内
第二七七號

第七期 第二回

昭和五年十二月廿五日印刷
昭和五年十二月廿八日發行

稀書複製會
非賣品

東京市牛込區富久町八十四番地
編輯兼發行者 山田清作
彫刻者 大塚[illegible]次
印刷者 阿部[illegible]九郎
發行所 東京市牛込區富久町八十四番地
米山堂

近付 秀衡并王莽が事

源平盛衰記巻第一

平家繁昌并得長寿院の導師の事

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の
ひゞきあり 沙羅双樹の花の色 盛者
必衰のことわりをあらはす おごれる
ものも久しからず 只春の夜の夢のごとし たけき
ものもつゐにはほろびぬ ひとへに風の前の塵に
同じ とほく異朝をとぶらへば
秦の趙高 漢の王莽 梁の
周伊 唐の禄山 これらは皆旧主先皇の

源平盛衰記巻第四十八

女院より回の浮沈并御物語

法皇御幸の事

さんぬる治承の頃より平家の一門ほろびうせて
...

たゞやうの素懐とげし也されば世
の中をさりけさ二人の外に女房も
随逐しこそあれども皆かくれつゝ
隠退の今はかりの命は池尻に帰りて
世のなかの隠居の人の里のくらしに
ゐて常住のとくさかりのみにかなしき方
なれども二人の心はつねになつかしく
来世の果のみをしてねがひ侍りし
しもそれをたゞ心に付て也侍りしが
女院も今生の御なげきは一旦の事候

識いこし莫大の因縁ありけりとて
く后妃のつゐには花の色も変りて
は仏の常楽をいのる也けれ源平
両家の人々も多くうき目を見し
けるもつゐにはやすらくの勝
因のきざしになりてをくわう人
なるをよろこびしや

源平盛衰記巻第四十八終

了

右以古本誤謬多之所勝書新去摘
以或語字或語点漁魯烏焉水馬
馬公竜之差何為哉今以仮名
代真名式正其語令少童易読
其之易読者也于時明暦元年乙未
十月中旬第二日
洛下野父羊波斎幸庵處士
書記之